



アモス 12世紀フランスの聖書写本

アモスはテコア出身です。テコアは南ユダ王国のベツレヘムの南にある町であり、アモスはそこで羊を飼い、イチジクを栽培していた農民ですが、同胞とはいえ、隣国北イスラエルに行って、「主は決して赦さない」(アモス1:3)と何度も、激しく糾弾したのです。ベテルの祭司アマツヤは、「郷里で預言活動をしろ」と言いましたが、「私は預言者ではない。預言者の弟子でもない」(アモス7:14)と言って、一介の自由人として、主が言われることを、齒に衣を着せず、正義感と怒りをもって、伝えるのだと言い続けたのです。アモスの活躍した時代はユダのウジア王(767-740BC)、イスラエルのヤロブアム王(782-753BC)時代、と言っていますので、760年前

後で、北イスラエルが政治的に安定し、領土的にも最大を誇った時代と言えるでしょう。

まず、イスラエルを中心とする周辺諸国を糾弾します。北はアラム、東はアンモン、西はティルスとペリシテ、南はモアブ。すべて暴力で富、領土を奪った罪、無慈悲に民を殺し、奴隷にした罪は決して赦されないとされます。最後に自らの民、ユダは主の教えを拒み、掟を守らない罪。イスラエルは偶像礼拝、貧しい人への不公正、金銭的腐敗の罪を挙げています。

アモスは出エジプトの民としての原点に帰るように説き始めます。神の選びがあったこと、様々な苦難は神の試練であったことを悟り、狂乱と圧制、不法と乱暴によって得た豪奢、繁栄の罪の現実を見て、身を正すようにと。富に奢っていても、旱魃、害虫、疫病、天災により、滅びた過去を思い出し、「イスラエルよ/お前は自分の神と出会う備えをせよ」(アモス4:12)と忠告します。

民の現実を見て、アモスは悲しみの歌も歌います。アモスが最も言いたかったことは「主を求めよ、そして生きよ」でしたが、頑なな民の姿に、アモスには民が滅ぼされる幻が次々と示されるのです。(1)いなごが大地の青草を食べ尽くす (2) 審判の火が畑を焼き尽くす (3) 下げ振り(振り子)が民の真ん中に下される=最終審判 (4) 一籠の夏の果物(カイツ)≒最後(ケーツ)の語呂合わせで示され、最終審判 (5) 神の剣の幻が続きます。アモスは苦しみますが、最終審判の日を「その日」と呼びます。そしてその日に先駆けて、「ただし、わたしはヤコブの家を全滅させはしないと主は言われる」(アモス9:8)という神の声を聞くのです。罪ある者すべてが裁かれ、滅ぼされても、神が憐みを持って、世界に目を注がれると言います。神の憐みの目からの視点をもアモスは伝えています。神の裁きから生き残る者もいると信じます。そして神は、民の破れ、廃墟を、回復、復興、修復されると、最後に伝えているのです。

アモスは組織や地盤のないただの預言者でしたが、弱い者への残虐が横行する現状に耐えきれず、義憤にかられ、正義感を持って、断罪し、その時代の問題の根をよく見据え、誰にもへつらわず、自由に発言できた人でした。また、最後の審判の日が来るという意識を持ちました。「その日」と言ったのはアモスが最初だったと言われています。アモスが吠えた、ということで、羊飼いでありながら、ライオンのような獰猛な雰囲気を感じさせる預言者だといえるでしょう。